

〈在外研究報告〉

内地留学報告

石井修道

一 はじめに——辞典・索引問答

昭和五六年度、「中国の唐宋時代を中心とする禅宗史の研究」を研究課題として、京都大学人文科学研究所の柳田聖山教授の指導の下に、京都大学人文科学研究所および花園大学で、公費在外研究を行う機会に恵まれ、さらに次年度まで延長を認められるという、まことに得がたい体験をすることができた。その間の成果を問われれば、恥かしい限りで、心中忸怩たるものがあるが、この間に感じた事柄や研究の様子を述べて報告に代えたいと思う。

入浴は、ゆりかもめのえさを沢山つみ込んだ不動産屋のくまに乗り込んで、下宿探しからはじまった。落ち着いたところは、船岡山の南の舟岡ハイツ三〇六号である。指導教授の柳田先生のお宅までは、歩いて一五分程の距離である。東面の窓越しからは、東山の全山の姿がながめられ、一きわ目

立つのは、比叡（四明嶽）の雄姿である。三階より下りて、近くを散歩すれば、家ごとに西陣の織物を作る機械の音が聞えてくる。西に百メートルも歩けば、千本通であり、かつて平安京の町づくりをするにあたって、船岡山に登り、船岡山から真南に中心の朱雀大路が走ったのが、今のこの通りといわれている。北に少し上ると北大路通で、南へやや歩くと今出川通である。日頃の散歩は、もっぱら船岡山で、まれに北大路通を越えて紫野大徳寺へ足が向くこともある。大徳寺の北にある今宮神社は、筆者が京都に腰を落ち着けかけた四月の第二日曜日にやすらい祭りを見物したところで、三大奇祭といわれるだけに、印象深いところである。

結果的には、よい場所に住んだと考えているが、こうして京都留学の生活がはじまったのである。

柳田先生の御指示通り、人文研と花大に月水金と大学院生に逆戻りした気で学校通いがはじまった。演習講義の内容

は、後に紹介することにした。その頃の柳田先生は、講談社の「人類の知的遺産」の一冊『ダルマ』（昭和五六年九月刊）の執筆に大忙しであった。

人文科学研究所は、スパニッシュ・ロマネスク様式の分館（東洋学文献センター）が北白川にある。研究会はもっぱらこの分館であるから、東一条の本館には、数える程しか行ったことがない。所長は福永光司教授である。道教学の世界的権威であり、教授を班長とする研究会には参加したので、後に詳しく紹介したい。

所長先生に御挨拶に行った折、いろんな話のなかで最も印象的な一つが、諸橋徹次博士の『大漢和辞典』一二巻にたよりにすぎる研究はだめである、という話である。実は京都でこの話は、その後、いろんな方々から耳にすることになる。所長先生のいわゆる話では、中国思想史、特に六朝時代の道教・仏教を研究する場合に、不十分だといっているのである。もっぱらそれにたよりにきっている筆者にとって、耳の痛い話である。話を聞いていて、確かになるほどとうなづけることばかりである。それでは、どのように辞書を使用していくか。それが人文研の長年の研究成果であり、まだまだ今後もつづくことであろう。まず『佩文韻府』の活用であり、『文選索引』の活用であり、その他、つぎつぎと成果の出ている索引を利用して、原典に即して解説していくということである。この

訓練になれていない筆者には、演習のやり方の一からのやりなおしである。

左京区にある人文研と共にお世話になったのは右京区花園妙心寺の近くの花園大学（移転した大学の正式な位置は中京区）である。大学の入矢義高教授の講義を聴いていて、また諸橋大漢和の話が出た。入矢教授は、一般の漢和辞典の欠点として、五つあげられた。(1)漢字の意味が①②③……と書かれてはいるが、その順序に意味がない場合が多く、中にはその意味で使用される用例はほとんどゼロに近いものでも、辞書にあるからといって漢文を読もうとするが、それは大変危険である。(2)語史的な配慮がない。漢字は、時代によって使用される意味が異なる場合がある。(3)詩語と一般用語との区別がない。(4)国訓と本義とのズレが明確でない。(5)文語と口語の違いが明確ではない。入矢教授は、授業で一つ一つ用例をあげながら説明された。特に筆者にとって禅籍にあらわれる俗語は、辞書がなくてお手あげだけに五番目の問題は深刻な問題であった。さて、その解決方法はというと、すぐにはなさそうである。

筆者は、その後、諸橋大漢和をどのように取り扱っているかという点、実は今まで以上によく使用しているのである。但し、両先生が言われた問題は、大切であり、辞書を引く場合注意する必要がある。かつて鏡島元隆先生に漢文の勉強

の仕方をうかがった折に、数多くの文献に当ること(慣れ)だ、と言われたことがあるが、これ以外に安易な方法はないということになる。そして、小川弘貫先生が、「君たちは人天の大導師です。辞書とは造るものです」といわれた言葉は、いまだに忘れられないもので、今も、しきりに思い出されてくるのである。

もう一つの話題に索引がある。いくつかの一字索引を研究会で寄贈してもらった。しかし、筆者にとって、印象深いのは、柳田聖山先生の『祖堂集索引』三冊である。下冊は、昭和五十八年度の発行に予定が延びたが、完成すれば『祖堂集』の研究だけでなく、禅語や禅宗史研究に大いに裨益すると思われる。三冊目に付される予定の解題も読ませていただいたが、その解題にも記されているように、索引は、今後おそらくコンピューターで処理されるであろう。この話は、索引研究の転換期を示唆している。実際、京大では、『康熙字典』の字母五万を核に、『十三経』をはじめとするいくつかの漢文文献がコンピューターに打ち込まれたと聞いた。出典研究の名人芸が変化し、訳註に活用され、個人が便利に使用するのは、いつか。あるいは自由に使えるまでになるのは、早いようで、まだまだ先のこともかもしれない。筆者には、端末を操作しながら論文を書いている姿は想像できない。もうすぐ四〇歳に手がとどくためであろう。

二 京都大学人文科学研究所にて

人文科学研究所は、一七部門と一附属研究施設から成り、研究の便宜上、これが日本・東方・西洋の三部に分けられている。一七の研究部門とは、日本思想・日本文化・日本社会・中国思想・中国社会・東洋考古学・現代中国・西洋思想・西洋文化・西洋社会・文化交渉史・歴史地理・芸術史・科学史・宗教史・社会人類学・比較文化の各部門であり、附属研究施設とは、東洋学文献センターである。筆者は、宗教史部門の研究員となった。

一九二九年に東方文化学院京都研究所(後身の東方文化研究所)が設立され、旧人文研究所と西洋文化研究所が東方文化研究所と合体して、一九四九年一月に発足した研究機関が、現在の京都大学人文科学研究所である。毎年、定期刊行物として、「東方学報」「人文学報」「東洋学文献類目」と欧文紀要「ZINBUN」があり、「調査報告」や単行本の「研究報告」が主な出版として出されている。

研究所の特色は共同研究である。三年ないし五年を基準とする共同研究班が構成され、一九八一年度の東方部研究班として、小野和子「明代の政治と社会」、山田慶児「新発見科学史資料の研究」、荒井健「李義山七律注釈」、梅原郁「中国近世の都市と文化」、狭間直樹「民国初期の文化と社会」、尾

崎雄二郎「小学研究」、柳田聖山「禅の文化」、福永光司「隋唐時代の道教と仏教」、竹内実「現代中国の社会と文化」、林巳奈夫「中国戦国時代出土文物の研究」、川勝義雄「中国貴族制社会の研究」があり、一九八二年度に新たな研究班として、山田慶児「中国古代の科学」、尾崎雄二郎「目錄学の諸問題」、吉川忠夫「六朝・隋唐時代の道仏論争」が加わった。筆者は、福永班（水曜日）と柳田班（月曜日）の演習に参加した。それぞれの研究班を紹介しておこう。

福永班の前の共同研究は「隋唐の思想と社会」で、研究所より『中国中世の宗教と文化』（一九八二年三月）として研究成果報告が刊行された。執筆者および内容は、福永光司「道教における天神の降臨授戒——その思想と信仰の源流——」、吉川忠夫「仏は心に在り——「白黒論」から姚崇の「遺令」まで——」、三浦国雄「慧遠における中国的思惟」、興膳宏「文心雕龍と出三蔵記集——その秘められた交渉をめぐって——」、荒牧典俊「南朝前半期における教相判釈の成立について」、小南一郎「六朝隋唐小説史の展開と仏教信仰」、川勝義雄「中国的新仏教形成へのエネルギー——南岳慧思の場合——」、愛宕元「隋末唐初における蘭陵蕭氏の仏教受容——蕭瑀を中心にして——」、荒井健「初唐の文学者と仏教——王勃を中心として——」、礪波護「唐中期の仏教と国家」である。いずれの論文も、読みごたえのあるすぐれた論文ぞろい

である。

このメンバーが母体となった福永研究班は、伝統的な人文研の研究を代表するものである。筆者が参加した時は共同研究の最終年度ということもあって、法琳『弁正論』の「九箴篇」の会読の外に、福永班長の道教学の講義があり（道教学の定義等に関しては、福永光司著『道教と日本文化』人文書院、一九八二年三月、参照）、成果報告を刊行する予定の研究発表が行なわれた。研究発表者と発表題目は、福永光司「唐代の宗教哲学における「気」と「理」、川勝義雄「唐の高宗と道教」、吉川忠夫「唐の玄宗と道教」、愛宕元「歐陽詢撰『大唐宗聖観記』について」、礪波護「法琳『弁正論』における仏教と道教」、諏訪義純「『元陽妙経』と『業報因縁経』」、麦谷邦夫「『道教義枢』の道教教理学」、神塚淑子「『海空智蔵経』の道教教理学」、池田秀三「唐代における易学と道教——孔穎達「周易正義」を中心に——」、柳田聖山「唐代禅教と「虚空」、興膳宏「『隋書経籍志』「道経」における道教教理」、小南一郎「唐臨『冥報記』と段成式『西陽雜俎』中の「玉格」、深沢一幸「杜甫『仰公紫微仙閣画太一天尊図文』について」、勝村哲也「『金石萃編』中の隋唐時代道教研究資料」、荒井健「初唐の文学と道教・仏教」である。

福永所長は、この年度で定年退官され、関西大学へ還られた。この研究班は、実質的には、新しい共同研究の吉川忠夫

班の「六朝・隋唐時代の道仏論争」に引き継がれた。甄鸞しんらんの『笑道論』の会読がつづけられ、筆者も一九八一年十二月一日、当番となり、基本的な知識がないので、冷汗をかきかき一応の役目を終えた。

柳田班は、『禅林僧宝伝』の会読である。一九八一年度は、巻六の洛浦く巻一二の薦福古までを読了した。一九八二年度は、巻一三の福昌善く巻二〇の言法華までを読了した。その間、研究発表として、田中利明「宝鏡三昧重離晷変訣の易学」(一九八一・五・一一)、柳田聖山・韓基斗「朝鮮の禅宗について」(一九八一・五・二五)、河内昭円「権徳輿と仏教」(一九八三・一・二四)、石井修道「中国五山十刹制度について」(一九八三・一・三一)があった。柳田班のメンバーは、吉川忠夫・御牧克巳・小林円照・沖本克巳・田中利明・武田秀夫・緒方香州・河内昭円・西脇常記・三浦国雄・西口芳雄・佐々木容道・須山長治・Kenneth L. Kraft・Bernard R. Faure・Theodore G. Foulk・Silvio Vita それに筆者である。当番が二ヶ月に一度の割合でまわって来て、大変勉強になったし、専攻している分野だけに楽しみもあった。一番、驚いたことは、『景德伝燈録』(台湾本)を全巻読破して、さらに禅籍を毎週読んでいる会が、現に国立大学に存在しているという事実であった。

柳田先生は、月曜日の午后、文学部の演習(実際は講義)

が一時限あり、『臨濟録』の「勘弁」と、翌年は『趙州録』を聴講することができた。その時間は、上田閑照教授も聴講されており、上田教授と柳田先生の二人の話を聞いたのも、大変たのしかった。二人の共著『十牛図——自己の現象学』(筑摩書房、一九八二年三月)が出版されたのも、この時である。以上は、五年に一度出版される「京都大学人文科学研究所要覧」第一号(一九八〇)に主に基づいて研究所を紹介した。

三 花園大学・禅文化研究所にて

財団法人禅文化研究所は、雑誌「禅文化」を季刊で出版していて有名であり、筆者も長期購読者の一人である。筆者が愛読したのは、柳田聖山先生の『祖堂集』ものがたり・第一話く第二十二話「禅文化」五一号、昭和四四年一月「禅文化」八二号、昭和五一年九月)である。この「禅文化」はすでに一〇〇号を越え、一〇六号と一〇七号には、昭和五七年度の禅文化研究所主催の夏期講座の講演、入矢義高教授の「雪峰と玄沙(上)(下)」が収まっていて、禅宗史の研究に大変示唆に富む内容となっている。

禅文化研究所については、「禅文化」一〇〇号記念特集に、前禅文化研究所主事木村静雄教授が「一〇〇号のあゆみ——禅文化研究所とともに」の一文を書かれ、概況を述べられて

いる。

昭和二四年四月、母体の花園大学が新制大学としてスタートし、季刊『禅文化』の創刊号が昭和三〇年六月ということである。その後のあゆみを、木村教授は、

昭和三十九年、禅文化研究会は財団法人禅文化研究所と成り、花園大学から独立したが、その後、花園大学は本山の境内から街頭に移転し、これを契機に財団法人は花園大学と実質的に統合し、曲りなりに一本化した。これによって妙な対立感を解消し、財団は財政上のピンチを切り抜け、大学は研究所の名で「禅の大学」という独自性をより鮮明に打ち出し、これからの私学戦国時代に対処することができよう。

と書かれている。「財団法人禅文化研究所名簿」(「禅文化研究所紀要」一号、昭和四四年)とは異なり、大学の移転を機に組織がえが行われ、筆者がお世話になった時は、平田精耕理事長を中心に研究部門の充実を将来はかりたいという計画があるとうかがった。

季刊「禅文化」の外に、「禅文化研究所紀要」の創刊号が、昭和四四年三月に発刊された。筆者の手元には、一二号(昭和五五年三月)までであるが、ここしばらく発刊されてはいないけれども、続刊の予定と聞いている。中国禅宗史研究者に一大ショックを与えた柳田聖山先生の名著『初期禅宗史書』

研究』は、昭和四二年五月に法蔵館より市販されたものであるが、もともと禅文化研究所研究報告の第一冊(昭和四〇年)として刊行されたものである。

この研究所の研究班も大変伝統あるものである。特に唐代語録研究班は、班長に柳田聖山先生、講師に入矢義高教授を迎えて、会読を行ってきたものである。入矢教授が人文研で、近世俗語研究の一環として禅の語録の研究会をはじめられ、やがてルース佐々木夫人の日米第一禅堂の『臨濟録』等の英訳に移るが、事実上、それらの仕事は、禅文化研究所の唐代語録研究班に引きつがれているといつてよいからである。『祖堂集』の会読が、その代表的な成果であることは、いうまでもない。

昭和五七年度の研究班は、入矢班、柳田班、平田班があり、平田班はドイツ語を中心とする研究と聞いたが、これには参加しなかった。

入矢班では、『玄沙語録』『玄沙広録』がテキストに選ばれて会読されていた。『馬祖語録』『百丈広録』を讀了して、新たに選ばれたテキストであり、筆者は『玄沙語録』の最初から参加することができた。七・八名のメンバーだから、当番に当たると読み誤りの箇所を指摘を集中砲火的にあびるようになる。筆者の最初の当番は、玄沙の臨濟批判のところを印象深く残っている。仏教学会定例研究会(五月二二日)で「玄

沙の臨済批判の上堂をめぐる——内地留学の報告を兼ねて——の題目で責めをふせがせてもらったのも、この時の機縁による。『玄沙語録』巻上が終わると、中統藏経の『玄沙広録』巻上に移る。大中寺に所蔵されていたとされる『広録』は宋版というが、他に今のところ対校するテキストもなく、入矢教授も、読めない、と言われることしばしばである。この研究会は、妙心寺前の「花家」の三階を貸し切って行われる。研究会が終わると、ビールを飲みながら水たきを食べて歓談する。その後、二次会に出かけることも、しばしばで、思いついた日である。昭和五七年度で、『広録』巻上を読了した。入矢教授の玄沙のとらえ方は、先に示した「禅文化」一〇六・一〇七号（昭和五七年一〇月・昭和五八年十一月）を是非参照していただきたい。

柳田班は、金曜日、一時半より、真字『正法眼蔵』（『三百則』）の会読である。金沢文庫本を最初に読みはじめられていて、筆者は二六則の会読より参加した。金沢本が終わると、金沢本に欠けた則や別則の中巻を一応終えて、上巻に戻るという順序であり、昭和五七年度は上巻一三則までを読了した。この研究班は、一日に二則読み、一則を一人で担当するので当番の回転はきわめて早いものであった。この班は、前述の語録研究班であるから、班長の柳田先生と共に講師の入矢教授が必ず出席されるもので、厳しい中になごやかな公案

解釈が話し合われた。主な研究会のメンバーは、平野宗浄・西村恵信・小林円照・古賀英彦・吉川忠夫・常盤義伸・沖本克巳・西尾賢隆・西口芳雄・川島常明・佐々木容道、そして筆者である。出典研究に『宗門統要集』を検討し、『三百則』と直接関係はしないが、『祖堂集』に関連ある則があると、それを指摘して、公案の成立過程をなごめるのも、『三百則』の研究としては特色あるものといえよう。班長の柳田先生が『思想読本 道元』（法蔵館、昭和五七年一月）を刊行されたのも、この研究会の成果と深い関係をもつものである。

花園大学では、入矢義高教授の演習講義も聴講した。入矢教授は、学部に一コマ、専攻科に一コマもたれている。昭和五六年度の学部は『羅湖野録』、専攻科は、『宗鏡録』をテキストに選ばれた。専攻科の学生に服部恭敬弁護士が在籍しておられ、いろんな御指導を受けた。昭和五七年度は、学部で『雲門広録』、専攻科で『従容録』をテキストに演習された。専攻科のテキストは、筆者の希望もくんでいただいたものである。『雲門広録』は、玄沙の弟子のものでもあるので、力の入った講義であった。平野宗浄・古賀英彦・沖本克巳・西尾賢隆・衣川賢次等の諸先生の顔がみられた。最近、入矢教授にお会いする機会に恵まれたが、『雲門広録』を思う存分に切り込んでいるとのことであった。雲門の禅宗史における位置づけは、今後の興味ある課題といえよう。

四 おわりに——研究方法論の話題

一回の会読は、二・三時間を平均とする。当番になれば、大変である。B4の用紙に、現代語訳と註を用意する。資料を二〇枚近く準備し、部分的にはコピーをはりつける。ここに参加している人は、それぞれの分野で、活躍している方々であり、毎週、一〇年一日のごとく研究会が行なわれている。還暦近い先生の提出された資料を、三〇位の若い研究者が異った意見を出して、より正確な現代語訳や解釈を衆智で完成していく。なんでもない風景のようであるが、果して学問の真理追求に、これ程、自分が真剣でありえようか、と反省が起きてくるのである。

東京に戻って筆者が一番、多くの質問を受けた内容は、「入矢先生は、中国語で演習をされますか」ということであった。筆者が参加したり、聴講した限りでは、中国語で演習をされることはなかった。ただ、中国語としての句読や調子を、口の中で、しばらく確かめられる場面には、毎回のように出合った。そして、「中国文は、中国語で発音して理解するように訓練を受けました」と述べられた。先日「悲しいことに『永平広録』も、中国語の発音でしばしば読むのですよ」と言われた。筆者は参加することはなかったが、長年にわたって教授の自宅で行なわれている「王梵志の研究会」

(教授のお宅が比叡平にあるので、お山の会というのだそうである)は、一応現代中国語で発音して会読が進められているとも聞いた。入矢教授の頭の中には、恐らく古典語としての発音も考えて、中国語の発音をされていると思うが、この点は直接にはお聞きしていない。

次に、再び福永光司所長との話にもどしてみたい。所長から質問された。「何を専攻していますか」。筆者は「中国禅宗史です」と答えた。所長はさらに質問された。「どんな方法で、?」。筆者はしばらく黙ったままで、答えられなかった。福永所長は、禅に若い頃から関心をもたれていたこと、東京大学の教授時代に駒沢大学へ講義に行つて、思想史として禅を考えることを大学院生に説いたけれども、ほんの一部のしか理解してもらえなかったことを述べられた。まだ多くの話はあったのだが、筆者が専攻している「中国」「禅宗」「史」というこの研究の方法と、そのための基礎的な勉強について強い反省がどこからともなく要求された。「中国」研究を、どれ程、筆者は従来やって来たか、中国語・中国哲学・中国文学への知識である。「禅宗」とは、仏教学・中国宗教・中国民族への知識である。「史」にいたっては、ほとんど東洋史の基礎知識もなければ、常識的な学問操作すら欠如していることである。その外、関連の学問は、まだ多く存在することであろう。従来の学問分野でいえば、中国学の文・哲・史

の研究と自己の研究との問題である。これが方法論の一つの反省である。

第二の問題については、入矢教授が『禅学大辞典』『中国仏教史辞典』について、つぎのような不満を述べられていることである。

これらの辞典には重だった禅僧の伝記が書いてあるので、すが、それらを読んでどうしても食い足らなく思いますのは、その記述が、いつ生まれて、どういう修行をして、どここの寺の住職になって、どういう布教をして、いつ死んだかという、ごくありきたりな記述しか書いてないという点です。肝心なことが書いてない。たとえば馬祖だったら馬祖禅の家風というか宗風・特質といったものについて一言も書いたものがないのです。(『禅文化』一〇六号、二三―二四頁)

この指摘が、筆者のいままでの研究と深く関係していることは確かであり、今後、思想ないし思想史(困難ではあるが)の研究をめざして行きたいと思っっているのである。なお、入矢教授の名著『求道と悦楽——中国の禅と詩——』(岩波書店、一九八三年一月)には、禅文献の読み方に関して有益な示唆が多くあるので、参照されたい。これが方法論についての第二の反省である。

人文研は、図書約二五万冊(一九八〇年三月現在)といわ

れる。ちょうど『京都大学人文科学研究所漢籍目録』(同朋舎、昭和五六年一二月)が市販された。これらの漢籍や京都の寺院の資料調査も予定していたが、ほとんど、その方面には手がまわらなかったことをつけ加えておかねばならない。

まだまだ、お世話になった先生方に一人一人謝辞を述べるべきであるが、十分にできないままとなった。最後に、本当に多くの京都大学・花園大学の諸先生方に御迷惑をおかけし、いろんな御指導を賜ったことに対し、厚くお礼を申し上げます。また、駒沢大学をはじめ、仏教学部の諸先生方にも、多くの迷惑をおかけしてしまっただが、おかげさまで、恵まれた在外研究をすることができたことを、心より感謝申し上げます。また、一九八二年度には、日本学術振興会の流動研究員に採用された。あわせてお礼申しあげたい。

なお、仏教学部定例研究会で発表した内容のうち、『宗門統要集』と真字『正法眼蔵』の関係については、『義雲和尚語録』の引用典籍について——延文二年本と真字『正法眼蔵』との関係を中心として(『永平中興義雲禅師研究』所収、祖山傘松会、現時点未刊)で触れたので、参照されたい。

(一九八三・七・二八)